

「民衆本ファウスト」について

精 園 修 三

1. 民 衆 本

15世紀から16世紀にかけてドイツでは、娯楽を目的とする散文形式の通俗本が広く流布した。後世のロマン派詩人達は、これらの書物が民衆の創作になり、民衆精神の表出であると考へて、その中の一人ヨーゼフ・フォン・ゲレスによって民衆本（Volksbücher）と命名された。しかし、その後の研究によると、これらの民衆本はまず貴族や上流階級のために往時の叙事文学が散文化されたものであり、それ故、それ相応の体裁と内容をとつて、作者も民衆ではなく当時の著名な作家であった。しかるに、16世紀中頃に印刷術が普及すると、安価な代りに粗雑な体裁で、作者不明の民衆本の大量生産が始まり、内容も広い読者層を満足させるための質的低下が起つた。すなわち、新たな購買層となつた市民階級は旧来の韻文文学を理解し得ず、散文でも複雑な言廻しでなく、直線的な表現を好んだからである。その代り、民衆本は従来上流階級にのみ属していた文学を民衆にも関与させる機会を与え、数世代後には文字どおり民衆の文学となつた。しかし、伝統の欠除と構成力の貧困は如何ともしがたく、またドイツ新興市民階級の發育不全も原因して、芸術的品位の高い文学作品を生み出すには至らなかつたが、バロック期の小説、更にはその次の時代の長篇・短篇小説を生み出す礎としての文学史的役割を果たした。

民衆本はその素材から二つのグループに大別される。その一つは、既に韻文で書かれてあつた古典作品を散文化したものであり、もう一つは、当時新たに創作されたものである。前者のグループの素材になつたのは、中世宮廷叙事詩（例えば「トリスタン」）、中世英雄叙事詩（「ジークフリート」）、イタリアの小説（「メルジーネ」）、ラテン語で書かれた聖者伝説（「グレゴリーウス」）、古代の伝説（「トロヤ物語」）、冒険小説（「フォルトナートス」）、動物文学（「ライネケ狐」）等であつた。これに対して、後者のグループに属するものは、いたゞら者の小話集である「ティル・オイレンシュピーゲル」、シルダ市民の愚行を集めた「ラーレブーフ」、そして魔術師伝説を集大成した「ファウスト博士」である。この三書は民間に流布してゐた口承の集成であり、また、ドイツ固有の文学素材という点で価値があるが、とりわけ「ファウスト博士」は後年極めて重要な文学上のモチーフとなり、幾多の作家によって繰り返して創作されるファウスト文学の出発点となつた。

2. 「民衆本ファウスト」

1587年10月に、フランクフルト・アム・マインのヨーハン・シュピース書店から、通称「民衆本ファウスト」⁽¹⁾ または Faustbuch と呼ばれる書物が出版された。この書物の人気

はさまざまに、次々と版を重ね、同時に改作版、翻訳版を生み出していった。「民衆本ファウスト」を名乗る書物は上記のシュピース版の外に、現在確認されているだけでも、1588年にテュービンゲンのホックによって韻文で書かれた版、1599年にルドルフ・ヴィトマンによって書かれた版、1674年に J. N. プフィツァーによって書かれた版、1725年に「キリスト教の心をもつ者」(der christlich Meynender) と名乗る作者によって書かれた版等がある。シュピース版以前にも、ヴォルフエンビュッテルで発見され、1582年から1586年までに書かれたと推定される手写本がある。このヴォルフエンビュッテル版とシュピース版の内容がほぼ同じであることから、両者が利用した共通の稿本の存在について、またその稿本の前にあったと仮定されるラテン語版について、更にはヴォルフエンビュッテル版とシュピース版がヴィトマン版に対して如何なる関係にあるかについて様々に議論されているが、決定的な結論はでていない⁽²⁾。なお、以下でとりあげるのは1587年刊行のシュピース版である。

「民衆本ファウスト」の作者については、シュピースが献辞の中で、「この物語はシュバイアーのある親友から最近私のところへ送られてきた」(3~4)⁽³⁾と述べていることから、二三の具体的な文人の名前が推測されているが、これも確証がない。言語学的調査によれば、文体の方言的特性から作者は確かにシュバイアー出身者らしい⁽⁴⁾。いずれにせよ、作者はかなりの教養とひろい知識を身につけ、多方面にわたる書物を自由に閲覧し得る人だったらしい。何故ならば、後述する如く、作者は1490年以降に出版された多数の書物の内容を「民衆本ファウスト」の中で利用し、引用しているからである。

この書物は当時の習慣に従って、次の様な長大な表題がつけられている。「ヨーハン・ファウスト博士の物語、この悪名高き魔術師、妖術師がいかにして悪魔に一定時を期して身を売ったか、そしてその間にいかなる奇異な出来事を見、みずからそれを惹き起こし、行い、ついに当然の報いを受けたか。すべての高ぶった、好奇心の強い、神にそむいた人々にとって恐ろしき実例、忌わしき模範、誠実なる警告として、大部分彼自身の著作より集め、印刷に付した」。次いで、二人の頭官に捧げる献辞と「キリスト教徒の読者への序言」が続く。本文は68章から成っているが、第44章が重複しているので、正確には69章である。特に表題をつけてない第1部(第1章―第17章)では、ファウストがワイマール近傍のロート村で生まれたこと、ヴィッテンベルクに学んで神学博士になったこと、やがて道を誤り、魔術にたずさわり、遂には悪魔を呪文で呼び出したこと、霊メフィストフェレスと数回にわたる問答の後、24年間の契約を結ぶ経過が語られる。その後に、メフィストのファウストに対する奉仕の様子、二人の間で交わされる様々な問答が続く。「次にはこの物語の第2部、ファウストの冒険と他の問いについて」という表題をもつ第2部(第18章―第32章)では、ファウストは天文学者として活躍し、メフィストと天体及びその起源と運行について問答した後、大旅行に出発する。ファウストはまず地獄、次いで宇宙、最後に世界の各都市を1年半にわたって旅行する。「次にはファウスト博士の冒険にして最後の部、彼が魔術によって貴頭の宮廷で何をなし、果たしたか、最後にまた彼の悲惨な恐ろしい最期と訣別」という表題をもつ第3部(第33章―第68章)では、前半がファウストの魔術師としての活躍ぶりを、後半は彼の死を報告する。ファウストは魔術の助けをかりて故人の生前の姿を呼び出す。彼はある騎士の頭に鹿の角をはやす。ある百姓の乾草を車と馬ごとのみ込む。三人の友人と空中を飛行したり、ユダヤ人をペテンにかけたりして、自分の技をいかんなく発揮する。ところで、ファ

ウストの隣人で敬虔な医師が彼の背教的な生活をとがめ、改心するよう忠告するが、ファウストは悪魔の誘惑に勝てず、契約を更新し直す件が挿入される。第60章から第68章までは、第3部の中でも特別のグループを形成し、「次にはファウスト博士がその最後の年に彼の霊および他のものに行った事、それは彼の約束の24年目にて最後の年であった」という表題が付されている。そこでは、ファウストは遺言を書き、召使いのワグナーを遺産相続人に指名する。ファウストが近づきつつある死を恐れ、嘆き悲しむと、悪魔はそれを嘲笑する。約束の24年が満ちる最後の日、ファウストはヴィッテンベルク近傍の村の宿屋で友人達に一切を告白し、自分の過ちを繰り返さないよう警告して、別れを告げる。その夜ファウストは悪魔に連れ去られる。友人達がヴィッテンベルクに戻ってみると、ファウストの家はこの物語を見出し、結末部分だけを彼らが加筆したとある。

以上の荒筋をもつ「民衆本ファウスト」は散文で書かれているけれども、現代のいわゆる小説ではない。話の筋は秩序立って進まず、前後関係がしばしば混乱する。同じような話が続いたり、同じ事件が少し内容を変えて二ヶ所に出てきたりする。各章がそれぞれ逸話風に語られ、全体が独立した小話の集積に近い。それは収集された口承の伝説と底本からの引用を統一した筋のある物語にまとめ得なかった作者の構構力不足であると同時に、当時の社会状況の忠実な反映でもあるとされる⁶⁾。貴族階級に成立母体をおく中世叙事詩は、時代の推移とともに、市民階級に成立母体をおく近代小説へと移行するのであるが、16世紀のドイツでは市民階級が未だ確立されず、その文学形式である本当の意味の小説も書かれ得なかった。「民衆本ファウスト」が示す奇妙な表現形式は過渡期の産物、小説成立の道を模索中の作品である。

3. 「民衆本ファウスト」の構成

「民衆本ファウスト」に登場するファウストは、約半世紀前に実在した史実のファウストとはもはや殆んど関係がない。それは伝説上のファウストである⁶⁾。ファウスト伝説は、史実のファウストの言行が誇張されて伝承されたものの外に、同時代または過去の時代の他の魔術師の伝承がファウストに転用された話から成っている。「民衆本ファウスト」の作者は市井に流布していたこの伝説を収集する一方、当時利用できた多数の書物からファウストに関する報告をひろい出し、別々の話をつなぎ合わせることによって、魔術師物語を作り上げた。この際、作者自身も他の魔術師の話をファウストに転用して収録した。

まず第一に、史実のファウストの言行が誇張されて伝承されたものの例として、シュピーアス版B第66章に「ファウスト博士、あるミサ僧のひげを手荒くそる」話がある。これはヨハネス・ヴィエルスが「悪魔の幻術について」(De Parestigiis Daemonum 第4版 1568年)の中で報告したファウストに関する逸話である⁷⁾。「民衆本ファウスト」の作者はこれを全文程んどそのまま引用し、結末部のみ修正している。

(De Parestigiis Daemonum)

Als vff ein zeit dieser schwartzkünstler
Faustus seiner bösen stück halben zu
Battoburg, welches an der Mose ligt,

(Faustbuch B 66)

Als auff eine zeit Doc. Faustus zu
Battoburg, welchs an der Mose ligt, vnd
mit dem Hertzogthumb Geldern gren-

vnd mit dem Hertzogthumb Geldern grentzet, in abwesen Graff Hermanns inn hafften kommen, hat jhme der Capellan deß orts, Herr Johan Dorstenius, ein frommer einfältiger manne, viel liebs vnnd guts erzeiget, allein der vrsachen halben, die weil er jme bey trewen vnd glauben zugesagt, er wölte jhn viel guter Künste lehren, vnd zu einem außbündigen erfahrenen manne machen...

So bald er aber das gethan, hat jme gleich das kinne dermassen angefangen zu hitzen vnd brennen, daß nit allein die haar jm außgefallen, sondern auch die haut mit sampt dem fleisch gar abgangen ist. Diß Bubenstücklein hat mir der Caplan mehr dann ein mal, aber allweg mit bewegtem mut selbst erzehlet.

tzet, in abwesen Graff Hermanns ohngefahr in gefängniß kömmen, hat ihme der Capellan des orts, Johann Dorstenius, vil liebs vnd guts erzeiget, allein der vrsachen halben, dieweil er, Faustus, jme, dem Pfaffen, zugesagt, er wolte jhn viel guter künste lehren, vnd zu einem außbündigen erfahrenen Mann machen...

So bald der Pfaff das gëthan, hatt jhme gleich das Kinne dermassen anfangen zu hitzen vnd brennen, das nicht allein die haar jhme ausgefallen, sondern auch die haut mit sampt dem fleisch gar abgangen ist. Ich meine das hieß dem Pfaffen den Bart scheren vnd den Wein zahlen. Fausti Mephostophiles kame bald darauff vnd lösete jhn auß der Gefänckniß vnd fuhre mit jhm daruon.⁽⁸⁾

次いで、同時代の他の魔術師の伝承がファウストに転用された例としては、第33章「ファウスト博士と皇帝カール5世の物語」がある。ここで、ファウストはカール5世の要望に応じて、アレキサンダー大王とその王妃の生前の姿を魔術で呼び出すのであるが、この物語の生成は以下の如くである。史実のファウストについて最も古く、また詳しい報告を残しているヨハネス・トリテミウスは⁽⁹⁾、1508年に皇帝マキシミアン1世によってボパルトの宮廷へ招かれ、8つの質問を受けたが、その1つは「魔女は様々な不思議な力をどこから得るのか、キリスト教徒にはなぜそれができないのか、神はなぜ無実な人間が魔女に害されるのを放置するのか」であった。トリテミウスはこの質問に長大な返答を与えているが、この質疑応答の内容を「8つの質問の書」(Liber octo quaestionum 1534年)にまとめた。しかし、彼は従来から黒魔術との関係を噂されたこともあって、世間では上記の次第がそのまま伝えられず、トリテミウスは皇帝の面前で魔術を披露した、亡き妃マリア・フォン・ブルグントの幻を見せたのだと噂された。この噂は1540年頃ある逸話集に書き留められたが、それに基づいて、ハンス・ザックスが「物語、ある降霊術師によって皇帝マキシミアンが見た、記憶をよみがえらせる不思議な幻影」(Historia: Ein wunderbarlich gesicht Keyser Maximilian, löblicher gedechtniß, von einem nigromanten 1564年)を書いた。ハンス・ザックスは登場する降霊術師の名を伏せたので、やがてこの物語の主人公はファウストだとされ、皇帝も→代後のカール5世とされた。この物語をピュットナーが「物語抜粋」(Epitome Historiam 1576年)に転載した時、問題の降霊術師には最初からファウストの名前が与えられていた。

次に、「民衆本ファウスト」の作者が他の魔術師の話をつまみかきして収録した例としては、第36章「ファウスト博士、ある百姓の車一台分の乾草を車と馬ごと喰らいつくす」話がある。この話の底本は、前述のビュッナー著「物語抜粋」で、原文は以下の如くであり、登場する魔術師はヴィルトフォイエルという名前である。

Vnd in der Stadt Northausen gieng ein Abentewrer aus vnd ein, dem begegnet ein Bawer mit seinem Wagen, der Zauberer mit Namen Wildfeuer, sprach zum Fuhrmann: Weich oder ich fresse dich hinab in meinen Wanst, mit Pferden vnd Wagen. Darzu muste der Bawer lachen, vnd achtet solche rede vor einen schimpff, Aber der sperret sein maul aus einander, vnd verschlang den Bawren mit Wagen vnd allem, wie er gesagt hatte, redlich, hernach eine halbe meil vor der Stad, lag der Bawer mit seinem Geschirr in einer Pfützen, dahin jn der Zauberer wider abgeleichtet vnd ausgespeyet hatte.

最後に、「民衆本ファウスト」の作者が広範囲にわたって利用した底本に、ハルトマン・シュエデルの「世界年代記」(Weltchronik 1493年)がある。第2部の大旅行でファウストが訪問する都市の記述はすべてこの書から引用されており、その一例を第26章から挙げる。

(Weltchronik)

PRag ein hawbtstatt des Behmischen königreichs… vnd in drey tayl. nemlich in klein prag. alt prag vnd new prag getailt. Klein prag begreift die lingken seyten der Mulda vnd berürt den berg auff dem dann der königlich hoff vnn sant Veits bischoffliche thumkirch ligt. Alt prag ligt gantz in einer ebne. mit großtatigen hohlöblichen gepewen gezieret. Auß derselben alten statt kombt man in die klainen vber ein staynine prugken. die hat .xxiii. schwingbogen…

(Faustbuch 26)

…das war Prag, die Hauptstatt in Behem, …vnd in drey Theil getheilt, nemlich alt Prag, new Prag vnd klein Prage, klein Prag aber begreift in sich die lincke seyten, vnd der Berg, da der königliche Hoff ist, auch S. Veit, die Bischoffliche Thumkirchen. Alt Prag ligt auff der ebne, mit großen gewaltigen Gräben geziert, Auß dieser Statt kombt man zu einer kleinen Statt Prag vber ein Brücken, die Brück hat 24. schwibbogen…

以上の外に、「民衆本ファウスト」の底本となったものに、プラントの「愚人船」(Narrenschiff 1494年)、ハンス・ザックスの「ニュールンベルク頌詞」(Lobspruch der statt Nürnberg 1530年)、ダシポディウスの「羅独語彙集」(Dictionari um Latino-Germanicum 1535年)、ルダーの「卓上談話」(Tischreden 1566年)、キルクダリウスの「神のあらゆる被造物……について」(Von allerhand Geschöpfen Gottes…1572年)等が確認されている。

「民衆本ファウスト」はこのように多数の書物を底本にしているが、作品全体が底本からの書き写しのみで成り立っているわけではない。作者の創作になるのか、底本に拠っているのかわからない章も多い。また、底本に拠った場合でも、作者は大抵引用文を削除、加筆し、更には自由に改作している。しかし、作者が手を加えたことによって、この作品が統一した筋のある小説に仕上げられなかったことは既述したとうりである。作者が手を加えた場合は大別して二つある。その一つは、既述した「あるミサ僧のひげを手荒くそる」話の結末部

(163)にみられる場合で、物語の連続性を保ち、前後関係の辻褄を合わせるために最少限の手が加えられている。もう一つの場合は、作者が自己の見解を書き加える場合で、その一例を第49章、「白の日曜日、魔法でよびだされたヘレナの話」にみる事が出来る。この章でファウストは、来訪中の学生達に求められて、古代ギリシャの美女ヘレナを呼び出してみせるのであるが、この章は次の言葉で終る。「……ところで学生達は寝床についたが、まのあたりに見たあの姿、形に寝つかれなかった。ここからわかることは、悪魔はしばしば人間を恋に燃え上らせ、目を眩ませ、その結果、人は淫蕩な生活におちいり、その後容易に抜けだせなくなるということである」(107)。ファウストがヘレナと同棲する逸話は未だ出典が解明されないものの一つであるが、ここで問題なのは、作者が加筆したに違いない最後の文章にあらわれた、ファウストとメフィスト及び彼らの言行に対する負の評価である。しかも作者はそれをいつも教訓調で述べている。彼には史実のファウストの伝記を書こうとか、新しい形式の文学作品を創作する意図はなかった。作者はこの作品によって、ファウストの名のもとに魔術師伝説を集成すること、それを一貫した思想のもとに描くことを目的としていた。「民衆本ファウスト」は何よりも思想が優先した作品である。

4. 「民衆本ファウスト」の思想

「民衆本ファウスト」はキリスト教会の立場で、神を離れ、悪魔と結託した男がたどる必然的運命を描いている。すなわち、ファウストを見せしめ (Warngestalt) としてキリスト教徒に警告するためである。作者はこの思想を終始明白にうち出す。この作品の表題でもすでに言われていることであるが、献辞と序言の中でも、「この物語を悪魔の欺瞞と、肉体と魂の殺りくの恐るべき実例として、あらゆるキリスト教徒に警告するために」(4)とか、「あらゆるキリスト教徒や理性ある人が悪魔とその企てをよく知り、それに対して身を守ることを学ぶように」(10)と繰り返される。そして、この物語の結末では次の言葉で再度総括される。「この物語からすべてのキリスト教徒、とりわけ、うぬぼれた、高慢な、生意気な、反抗的な心と頭をもつ者は、神を恐れ、魔術や呪文、その他神が禁じた悪魔の業を避け、ファウストがしたように、悪魔を招き入れたり、悪魔につけいる余地を与えてはならぬ。ここに彼の契約と最期の恐ろしい実例が示されている。かかることには目もくれず、神のみを愛し、ひたすら崇め仕え、悪魔とその手下のすべてと縁を切り、キリストと共に永遠の浄福に与らねばならない」(135)。

ところで、ここで言われているキリスト教とは新教のことである。そのことは旧教と新教の深刻な対立のなかで、シュペース出版社が占める地理的位置、及びこの出版社が幾多の新教派の宣伝パンフを印刷していた事実から明らかであるが、作品中に用いられている「古い信仰」に代る「真正の宗教」(4)とか、「キリスト教的信仰」(4)なる言葉からも確認されている。この作品の主人公が活躍する時代は宗教改革以前のことであり、場所は史実のファウストの主たる活動舞台だったドイツ南部からヴィッテンベルクへ移されたのも、改革以後ルターの居住地ではかかる妖怪が姿を消したとして、新教の勝利を強調するためだったらしい。それ故、旧教は回教同様、攻撃の対象となる。悪魔がフランシスコ派の僧の姿をして現われるとか、ファウストがローマのバチカン宮殿であばきたてる退廃の数々や法王を相手

に行ういたずらは、コンスタンチノーブルを訪れた際、トルコ皇帝のハーレムで行う乱行と同質のものである。また、ファウストは二度にわたって自分の所業を悔い、改心しようとするが、いずれの場合も許されない。ファウストの改心の試みがメフィストの厳しい妨害にあうためというよりは、作者自身によって最初からそのように決められていて、許されない理由としては、それが真実の後悔でなく、「カインとユダの悔い」(37) だとこじつけられる。一たん悪魔に魂を売った男に対する弾劾が厳しいのは、懺悔によって神の思寵を得られるとする旧教の考え方に対し、新教は義認(Rechtfertigung)をひたすら神の意志にゆだねているからである。

ファウストは信仰あつい百姓の息子で、裕福な伯父の養子となり、学校で神学を学んだ。彼は「すぐれた天分と記憶力」(12)をもった「全く聡明で利発な頭脳をもち」(12)、遂には神学博士となった。一方彼は「愚かな不遜な頭をもち、悪い仲間には入り込み、聖書を戸口のそと、ベンチの下に置き、放埒な神にそむく生活をした」(13)。すなわち、彼は魔術の類にたずさわって、「日夜その思索と研究に没頭した」(13)。「天地のあらゆる根元を究め」(14)、「諸元(Elementa)を考究」(22)するためである。しかし、「天より下し与えられ、めぐみ深くも伝えられた天賦をもってしては、かかる能力をわが頭脳の中にみとめず、また人間よりは教えられ得ぬゆえに」(22)、彼はメフィストと24年間の期限で契約を結び、死後の肉体と魂とひきかえに、自分の望みを達成しようとする。

ファウストが悪魔と契約を結ぶに至る経過は、このように彼の無限の知識欲に根ざしており、ルネッサンスの典型人の行動である。静寂と暗闇の中世から流動と曙光の近世への推移を体験した人達は、立ち歩きを覚えた幼児の如く、また突然視力を獲得した盲人の如く、無限の可能性を求めて駆けめぐらざるを得ない。ファウストはメフィストと様々な問答を交わし、メフィストの助けをかりて世界各地を旅行するが、彼のあらゆるものを問いただし、すべてのものを自分の眼で見ようとする態度は、彼の知識欲の具体的なあらわれであり、この態度こそ近代自然科学の出発点となった。しかし、一たん知ることの喜びを覚えた人間は、自分の知識の領域を次第に拡大していく。そのためには手段を選ばない。ファウストがまず神学を学び、次いで現代の自然科学のことである魔術にたずさわって、それにも飽き足りず悪魔に助力を求める経過は極めて象徴的であり、現代文明の問題点はすでに提起されている。

しかし、「民衆本ファウスト」の主人公の罪は魔術の行使とか悪魔との契約にあるのではない。ファウストの罪は、キリスト教理に従えば、彼の無限の知識欲にあり、この欲望こそがすべての悪の根源である。「ファウスト博士の目標は愛すべからざるものを愛することであり、昼も夜もそれを求め、鷲の翼をつけ、天と地のあらゆる根源を究めようと欲した。彼の好奇心、奔放さ、軽率さは彼をそそのかして」(14)悪魔を呼び出すに至る。自然科学者の態度がいつかはキリスト教理と対立する結果を生むことを予測した教会関係者にとって、ファウストの知識欲は「高慢なる好奇心」として葬らざるを得ない。作者はこの教理に従い、ファウストを一たんは「鷲の翼」ではばたかせながら、やがて後悔させ、許されぬ身を快樂の淵に沈めて時を忘れる小心者に変えていった。作者はファウストの嘆きの言葉の中で、「理性」とか「自由意志」を呪わせ(124, 125)、最後には次のように言わせている。「このような悪魔的快樂に私を導いたのは……私の役たたずの肉と血、強情な神にそむく意志、私の抱いた不遜な悪魔的思想です」(131)。ファウストは新しい時代感覚を体現しながら、そ

れを意識し、自己の主張として貫き通すだけの自我に欠ける人物となった。彼は折角手に入れた能力を自己の享樂追求にしか使い方を知らない。新時代の諸問題を胚胎して生まれたファウスト伝説を、キリスト教という旧思想で包み込み、旧道徳で裁きつつ文学化したのが「民衆本ファウスト」であり、ヘニングが「ある文学テーマが革命的進歩階級の文化から成長し、その素材が支配的反動層の文化にゆがめられて利用された典型的な例」⁴⁰と述べるゆえんである。

5. 終りに

1587年10月に出版されたシュピース版「民衆本ファウスト」は大変好調な売れ行きを示した。出版年内の3ヶ月だけでも5版を重ね、海賊版も含めると、1599年までに22版に達した⁴¹。その原因の一つは魔術に、もう一つはこの書物の娯楽性にあったと考えられる。当時の人達は悪魔や魔女の存在と、それらが行う妖術の類いの効力を実際に信じていたらしいが、教会が教えるとうり、それを頭から忌避したわけではなく、不気味に感じながらも多大の関心を寄せていた。その頃出版された膨大な魔術関係書の存在がそのことを教えてくれるし、当時の文学作品、例えばハンス・ザックスの謝肉祭劇「悪魔を呼び出す遍歴学生」(Der farenndt Schüler mit dem Teuffelbannen 1551年)の中では、悪魔に対する庶民の好奇心が見事に描かれている。また、ファウストの生活は「豚のような享樂的生活」(119)として厳しく戒められているが、ファウストの乱れた女性関係を述べるきわどい表現、馳走が数行にわたって列挙される宴会の詳しい描写、旅行記にも匹敵するファウストの世界旅行の記述等は、娯楽本の常として、そうした機会を持ち得ない庶民の夢をかきたてる一方、そうした機会を持つ人を勸善懲惡的に断罪して庶民の欲求不満を解消する役割を果たした。いずれにせよ、この書物の好評はキリスト教徒に対する見せしめとしてのファウスト像を定着させる結果となった。当時、この書物に対する批評が、作者のファウスト弾劾にあきたらないとする発言こそあれ⁴²、逆の見解は皆無だったし、それ以後別の作者による改作版が、量を水増しこそすれ、根本思想においてはシュピース版を継承したからである。それは、ドイツ領邦国家が着実に地歩を固めつつあり、新教が定着してはやくも形骸化し始め、ハンザ同盟とフガー家の没落に象徴されるドイツ経済衰退の時代、すなわち、停滞と反動化の時代であった。ファウストが自己の願望充足のために敢然と立ち向い、戒律よりも享樂に、信仰よりも知識のために生命を賭ける新しい人間像として見直されるためには、ドイツはまだ30年戦争(1618—48)の試練を経なければならず、それ故、さもなければ矮少化の一路をたどったであろうファウストを、宗教的拘束は脱し得ないながらも、真理探求に努力する人間像として保持する役割を果たしたのが、マーローの「フォースタス博士の悲劇」(The Tragical History of D. Faustus 1588—89年)であった。

注

- (1) *Historia von D. Johann Fausten / dem weitbeschreyten Zauberer vnnd Schwartzkünstler.* Gedruckt zu Frankfurt am Mayn / durch Johann Spies 1587. (Herausgegeben und eingeleitet von Hans Henning. VEB Verlag Sprache und Literatur. Halle (S.) 1963) なお、このテキストの全訳が、道家忠道編「ファウスト その源流と発展」(朝日出版社 1974年)に収められている。
- (2) Henning, Hans : *Einleitung in "Historia von D. Johann Fausten"* Halle 1963. S. XLIII-XLVIII.
Haile, H. G. : *Das Faustbuch nach der Wolfenbüttel Handschrift.* Erich Schmidt Verlag. Berlin 1963. S. 16-22.
- (3) 括弧内の数字は注(1)のテキストの頁を示す。なお、道家氏の訳文を参考にした。
- (4) Henning, Hans : a. a. O. S. XLII.
- (5) Henning, Hans : a. a. O. S. LI.
- (6) 史実のファウストと伝説上のファウストの関係については、拙論「史実のファウストとその伝説形成」(信州大学教養部紀要 人文科学 第11号 1977年)を参照。
- (7) 拙論「史実のファウストとその伝説形成」192頁。
- (8) こうした資料は注(2)及び Henning, Hans : *Faust als historische Gestalt.* In : *Neue Folge des "Jahrbuchs der Goethe-Gesellschaft"* Bd. 21. Weimar 1959. から転載した。
- (9) 拙論「史実のファウストとその伝説形成」187-188頁。
- (10) Henning, Hans : a. a. O. S. LX.
- (11) Henning, Hans : a. a. O. S. LXIX.
- (12) Henning, Hans : a. a. O. S. LXII-LXIV.

Zusammenfassung

Über das Volksbuch von Faust

Shûzô SEIEN

Das "Faustbuch", das 1587 im Verlag des Frankfurter Druckers Johann Spies erschien, ist die erste der Faust-Dichtungen, die sich durch die deutsche Literaturgeschichte wie ein roter Faden ziehen. Das Buch wurde von einem unbekanntem Verfasser in Prosaform geschrieben, aber formal kann es als Roman nicht gelten. Es besteht aus einer Aneinanderreihung von Geschichten, d. h. von Anekdoten, Schwänken und Erzählungen, die der Verfasser aus vielen Büchern geschöpft hat, und hat keine einheitliche Handlung noch Konstruktion. Das war auch nicht das Anliegen des Verfassers. Er wollte, unter dem kirchlichen, besonders lutherischen Gesichtspunkt, Faust als Bundesgenossen des Teufels herabsetzen und vor seinem gottlosen Leben warnen. Der Erkenntnisdrang bei Faust, der ein typischer Renaissance-Mensch war, wird als Fürwitz gewertet. Hier erscheint Faust unvermeidlich als bloßer Lebensgenießer. Aber das Bild eines Menschen, der unablässig nach der Wahrheit ringt, blieb trotz aller Entstellung des Faustbuch-Verfassers erhalten.